

[B年] 受難節第3主日(2026年3月8日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書 48章1～8節**

- 1 ヤコブの家よ、これを聞け。
ユダの水に源を發し
イスラエルの名をもって呼ばれる者よ。
まこともなく、恵みの業をすることもないのに
主の名をもって誓い
イスラエルの神の名を唱える者よ。
- 2 聖なる都に属する者と称され
その御名を万軍の主と呼ぶイスラエルの神に
依りすがる者よ。
- 3 初めからのことをわたしは既に告げてきた。
わたしの口から出た事をわたしは知らせた。
突如、わたしは事を起こし、それは実現した。
- 4 お前が頑固で、鉄の首筋もち
青銅の額をもつことを知っているから
- 5 わたしはお前に昔から知らせ
事が起こる前に告げておいた。
これらのことを起こしたのは、わたしの偶像だ
これを命じたのは、わたしの木像と銅像だ
お前に言わせないためだ。
- 6 お前の聞いていたこと、そのすべての事を見よ。
自分でもそれを告げうるではないか。
これから起こる新しいことを知らせよう
隠されていたこと、お前の知らぬことを。
- 7 それは今、創造された。
昔にはなかったもの、昨日もなかったこと。
それをお前に聞かせたことはない。
見よ、わたしは知っていたと
お前に言わせないためだ。
- 8 お前は聞いたこともなく、知ってもおらず
耳も開かれたことはなかった。
お前は裏切りを重ねる者
生まれたときから背く者と呼ばれていることを
わたしは知っていたから。

【使徒書日課】 テモテへの手紙二 1章8～14節

8だから、わたしたちの主を証しすることも、わたしが主の囚人であることも恥じてはなりません。むしろ、神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを忍んでください。9神がわたしたちを救い、聖なる招きによって呼び出して

くださったのは、わたしたちの行いによるのではなく、御自身の計画と恵みによるのです。この恵みは、永遠の昔にキリスト・イエスにおいてわたしたちのために与えられ、¹⁰今や、わたしたちの救い主キリスト・イエスの出現によって明らかにされたものです。キリストは死を滅ぼし、福音を通して不滅の命を現してくださいました。¹¹この福音のために、わたしは宣教者、使徒、教師に任命されました。¹²そのために、わたしはこのように苦しみを受けているのですが、それを恥じていません。というのは、わたしは自分が信頼している方を知っており、わたしにゆだねられているものを、その方がかの日まで守ることがおできになると確信しているからです。¹³キリスト・イエスによって与えられる信仰と愛をもって、わたしから聞いた健全な言葉を手本としなさい。¹⁴あなたにゆだねられている良いものを、わたしたちの内に住まわれる聖霊によって守りなさい。

【福音書日課】マルコによる福音書 8章27～33節

²⁷イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。²⁸弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」²⁹そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」³⁰するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。

³¹それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。³²しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。³³イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書 48章1～8節

- 1 ヤコブの家よ、このことを聞け。
 イスラエルの名で呼ばれ
 ユダの流れを汲む者よ。
 主の名によって誓い
 イスラエルの神の名を唱えるが
 真実もなく、正義もなくそれをなす者よ。
- 2 彼らは聖なる都の者と名乗り
 万軍の主の名を持つイスラエルの神に
 依りすがっている。
- 3 先にあったことを私は昔から告げてきた。
 それは私の口から出て、それを聞かせた。
 突然私は実行に移し、それは実現した。
- 4 あなたがかたくなで
 首が鉄の筋、額が青銅であるのを
 私は知っていたので
- 5 私は昔からあなたに告げ
 それが起る前から告げていた。
 「私の偶像がこれらを行った」とか
 「私の彫像や鑄造がこれらを命じた」などと
 言わせないためだ。
- 6 あなたが聞いた、そのすべてを見よ。
 あなたがたは告げようとしぬのか。
 これから私が新しいことを聞かせよう
 あなたの知らない秘められたことを。
- 7 それは今創造された。
 昔からあったことではない。
 今日まで、あなたはこれを聞いたことはない。
 「私それを知っていた」などと
 あなたに言わせないためだ。
- 8 あなたは聞いたこともなく、
 知ってもいなかった。
 あなたの耳はずっと前から開かれていなかった。
 あなたが必ず裏切ることを
 母の胎にいる時から背く者と呼ばれていたことを
 私は知っていたから。

テモテへの手紙二 1章8～14節

8ですから、私たちの主を証しすることや、私が主の囚人であることを恥じてはなりません。むしろ、神の力に支えられて、福音のために、苦しみを共

にしてください。9神が私たちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださったのは、私たちの行いによるのではなく、ご自身の計画と恵みによるのです。この恵みは、永遠の昔にキリスト・イエスにあって私たちに与えられ、10今や、私たちの救い主キリスト・イエスが現れたことで明らかにされたものです。キリストは死を無力にし、福音によって命と不死とを明らかに示してくださいました。11この福音のために、私は宣教者、使徒、教師に任命されました。12そのために、私はこのように苦しみを受けているのですが、それを恥じてはいません。私は自分が信じてきた方を知っており、私に委ねられたものを、その方がかの日まで守ることがおできになると確信しているからです。13キリスト・イエスにある信仰と愛をもって、私から聞いた健全な言葉を手本としなさい。14あなたに委ねられた良いものを、私たちの内に宿っている聖霊によって守りなさい。

マルコによる福音書 8章27～33節

27イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリアの村々へ出かけられた。その途中、弟子たちに、「人々は、私のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。28弟子たちは言った。「洗礼者ヨハネだと言っています。ほかに、エリヤだと言う人、ほかに、預言者の一人だと言う人もいます。」29そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたは私を何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」30イエスは、ご自分のことを誰にも話さないようにと弟子たちを戒められた。

31それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちによって排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。32しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスを脇へお連れして、いさめ始めた。33イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人のことを思っている。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・3月8日「受難節第3主日」の日課主題は「受難の予告」。

・旧約日課は、「イザヤ書」から、ユダ＝イスラエルに対する神の予めの計画を告げる預言の箇所。使徒書日課は、「テモテへの手紙二」から、挨拶に続いて最初の勧めを述べた箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、ペトロの信仰告白と主イエスの受難予告がなされたことを伝える伝承説話箇所。

旧約日課(イザヤ 48章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「後の預言者」の第一に置かれた預言文書。前8世紀後半に南王国ユダの四代の王に仕えた宮廷預言者「アモツの子イザヤ」の預言句と言行録を編纂した預言書という体裁で標題(1:1)が付されているが、配置および内容から、40章以下は、歴史的な預言者「イザヤ」に帰される預言句ではなく、前6世紀、バビロン捕囚から解放されエルサレム再建事業が開始されていった時期に「イザヤ」の伝統を継承することを謳った祭司預言者(集団)によって告げられたものと考えられている。この40章以下の部分を、一般に「第二イザヤ」と呼んでいる。

・「第二イザヤ」は、バビロニアによってエルサレム王権を断たれながら「捕囚の民」としてバビロンで生き続けた旧ユダ王国の王族・貴族・祭司らをはじめとする末裔に対して、バビロニア支配を終わらせ新しい帝国支配者として登場したペルシア王キュロスを「主に油注がれた者」として位置づけながら、キュロス王によって認可された「ユダの民」によるエルサレム帰還・再建事業を神の計画として受け入れさせ、参画を促すために、預言を展開している。その際、これが神の計画であることの必然性を示すために、「第二イザヤ」は、「ユダ」が同国より130年以上前にアッシリアによって解体された旧北王国「イスラエル」＝北部諸部族連合国家の王権を正統に継承する民であるというヨシヤ王時代(在位＝前640～609年頃)以来の政治的歴史観を前提として預言を述べている。

・日課箇所は、「ヤコブの家」＝「イスラエル」に呼びかける預言として始められているが、その中に「ユダの水に源を発し」という句が含まれ、「ヤコブの家＝イスラエル」が本来「ユダ＝エルサレム」と同根であるという「大イスラエル主義」の立場が示唆されている。このような主張は、「旧約」正典編纂の過程において大前提として「イスラエル正史」の土台とされていったと考えられる。ペルシア王の裁可により「ユダ総督」に任じられたのはダビデ王家の捕囚王ヨヤキンの末裔の一人「ゼルバベル」であったとされ(ハガイ 1:1 など参照)、彼の下に旧イスラエル王国構成諸部族が結集することを呼びかけるためかもしれないし、あるいは、彼ら諸部族が「ユダ族」の主導を拒むことに対する自分たちの正当性主張のためかもしれない。

・日課箇所の預言は、前半部(3～6節前半)と後半部(6節後半～11節)で内容的に分けられる。前半部では、神がすでに告げたことを「イスラエル」は知っているはずだ、という確認の預言であるが、後半部は、まだ告げられていなかったこれから起こされる新しい計画を告げよう、という告知の預言となっている。これらは、一見すると矛盾しているようにも見える。前半部は、これから起こることをあらかじめ告げておいたから知っているはずだ、としているが、後半部は、これから起こることをこれまでは隠していたが今新しいこととして知らせよう、とされている。実際には、預言者は、前半部と後半部を通して、聴き手の「イスラエル」がこれまでは事実上聞いていたなかったことを、今、まさにこれから起こる「新しいこと」として神が告げるから心して聞くように、と展開しようとしているのだろう。この展開によって浮き彫りにされるのは、聞き手「イスラエル」が神の告げることを聞くことをしない者たちであるが、他方で神がそれにもかかわらずご自身の計画遂行のために彼らを捨てることが決してない誠実な存在である、という一貫した視点である。

使徒書日課(Ⅱテモテ 1章より)

・「テモテへの手紙二」は、「パウロ書簡集」の中、「手紙一」および「テトスへの手紙」とともに「牧会書簡」としてまとめて扱われる書簡文書。「テモテ」および「テトス」は、両者とも「パウロ書簡集」の中で繰り返しその名が言及されるパウロの協力者。特に「テモテ」は、「使徒言行録」の物語る「パウロ宣教旅行伝承説話」でも繰り返し登場する人物で、パウロが独自の宣教団を組織したとき(使徒 16:1 以下参照)、特に選んで同行させるようになった者として知られる。それによれば、「テモテ」は、ユダヤ人の母とギリシア人の父を持ち、パウロに見出されるまで割礼を受けずに来た経歴を持っていたとされる(使徒 16:3)。おそらく、そのことでユダヤ会堂では会堂共同体の正規構成員として認められ難い存在だったと推認される。ところが、彼は、母や祖母と共にキリスト者の共同体に受け入れられていたために(Ⅱテモテ 1:5)、パウロの目に留まったのである。パウロが「ガラテヤ書」で激しく展開するような「割礼不要論」を主張するようになった背景には、「テモテ」のような無割礼者を受け入れるキリスト者共同体がすでに機能していたことがあったのだろう。もっとも、「使徒言行録」によれば、パウロはユダヤ人を相手に宣教活動をするにあたって、テモテに割礼を受けさせたと伝えられており、「割礼否定論者」だったわけではない。

・日課箇所は、パウロ自身の「囚人」状態を踏まえて、宣教者として受ける酷い苦しみを恥じることなく耐えて健全な信仰を保つことを勧めている。8節「共に苦しみを忍んで(ジュンカコパテオー)」の直訳は「共に酷く苦しむ」。

・12節「信賴している」の原語は「ピステウオー」で、「信仰(ピステイス)」の動詞形。

福音書日課(マルコ 8 章より)

・日課箇所は、「ペトロの信仰告白と主イエスの受難予告」を一つの場面の中で描く伝承説話箇所、「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えている。「共観福音書」は、ここから初めて、続く「高い山での主イエスの変貌」などを含む伝承説話群を、「エルサレム入城」に先立つ「受難物語前史」として共有している。

・日課箇所冒頭で主イエスが弟子たちに御自分についての人々の認識を問ひ、また弟子たちの認識を問うという場面は、「受難物語前史」および「受難物語」に入っていくにあたっての読者への問いかけとなっている。この問いに対するペトロの答え、「あなたはメシアです」は、一般にペトロの「信仰告白」と位置づけられており、これを「マタイ」は「あなたはメシア、生ける神の子です」(マタイ 16:16)と、また「ルカ」は「神からのメシアです」(ルカ 9:20)と、補足して伝えているが、骨格となる「メシア」は変わらない。ここで「メシア」と訳されている語は、ギリシア語本文では「キリストス」で、旧約ヘブライ語で「油注がれた者」を意味する「マシアハ」に対応する訳語。ギリシア語「キリストス」を「油注がれた者」の意で用いるのは、ギリシア語訳旧約聖書(七十人訳)および新約等キリスト教文書以外では知られていない(ごく少数、「軟膏」または「漆喰」の意味での用例が知られている)。旧約の用法で「メシア」は、神的存在を表すことはなく、神が特別な使命を与えて遣わす人間を指す。1 世紀当時のユダヤ教界隈でも、「メシア」を神的存在として扱うのは、黙示思想に影響を受けたごく限られた人々のみ。

・30 節の沈黙命令についての解釈は、19 世紀末の新約学者 W.ヴレーデの「メシアの秘密」論など、議論が重ねられてきたが、広く共有された理解はない。「マルコ」は、標題に「神の子イエス・キリストの福音の初め」とする一方、最後、十字架上のイエスに対して人々が嘲笑して「メシア」と叫んだことを描いており(15:32)、読者にイエスを「メシア＝キリスト」として理解することの意味を問うているのは間違いない。

・33 節「サタン、引き下がれ」の直訳は、「わたしの後に行け、サタン」。「わたしの後に(オビソムー)」は、1:7、1:17、8:34 にも見られる特徴的な表現。

来週の誕生日 (3月8日～14日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-160「深き悩みより」(= I 258「貴きみかみよ」)は、M・ルターが宗教改革運動の初期にドイツ人庶民のための詩編歌として作詞した一つで、詩編 130 編に基づいて作詞、1524 年出版の讃美歌集に加えられた。いくつかの曲で歌われてきたが、160 番は M・ルター自身が古い教会旋法に基づいて作曲したもの。同じ詞にダハシュタインの曲を付したものが 21-22 番。『讃美歌 21』に採用される際に原詞に基づいて改訳されている。

・21-443「冠も天の座も」(I 124「みくにをも宝座をも」)は、19 世紀英国教会司祭の娘エミリ・エリオットが、父の牧する聖マルコ教会の聖歌隊のために作詞。曲は、別の讃美歌集への採用に際して、この歌詞のためにマシューズが作曲。

・21-505「歩ませてください」(曲 = I 353)は、19 世紀末米国の会衆派牧師 W.グラッドンが雑誌に掲載する宗教自由詩として創作したものが原作で、その後、グラッドンの指定した曲とのセットで讃美歌集に採用され、広く歌われるようになった。この曲は、もともと「わが魂のひかり」(21-214 番)のために作曲されたもの。

21-160「深き悩みより」

Aus Tiefer Not Schrei Ich zu Dir

1. Aus tiefer noth schrei' ich zu dir, / Herr Gott! erhör' mein rufen! / Dein gnädig ohr neig her zu mir, / Und meiner bitt' sie öffne: / Denn so du willst das sehen an, / Was sünd' und unrecht ist gethan, / Wer kann Herr! für dir bleiben?
2. Bei dir gilt nichts denn gnad' und gunst, / Die sünde zu vergeben; / Es ist doch unser thun umsonst, / Auch in dem besten leben: / Für dir niemand sich rühmen kann, / Deß muß dich fürchten jedermann, / Und deiner gnaden leben.
3. Darum auf Gott will hoffen ich, / Auf mein verdienst nicht bauen; / Auf ihn mein herz soll lassen sich, / Und seiner güte trauen, / Die mir zusagt sein werthes wort, / Das ist mein trost und treuer hort, / Deß will ich allzeit haren.
4. Und ob es währ' bis in die nacht / Und wieder an den morgen, / Doch soll mein herz an Gottes macht / Verzweifeln nicht noch sorgen. / So thu' Istrael rechter art, / Der aus dem Geist erzeuget ward, / Und seines Gott's erharre.
5. Ob bei uns ist der sünden viel, / Bei Gott ist vielmehr gnaden, / Sein' hand zu helfen hat kein ziel, / Wie groß auch sei der schaden. / Er ist allein der gute hirt, / Der Israel erlösen wird / Aus seinen sünden allen.

21-443「冠も天の座も」

Thou didst leave Thy throne

1. Thou didst leave thy throne / And thy kingly crown / When thou camest to earth for me, / But in Bethlehem's home / Was there found no room / For thy holy nativity: / O come to my heart, Lord Jesus; / There is room in my heart for thee.
2. Heaven's arches rang / When the angels sang, / Proclaiming thy royal degree; / But of lowly birth / Didst thou come to earth, / And in great humility: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
3. The foxes found rest / And the birds their nest / In the shade of the forest tree; / But thy couch was the sod, / O thou Son of God, / In the deserts of Galilee: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
4. Thou camest, O Lord, / With the living word, / That should set thy people free; / But with mocking scorn, / And with crown of thorn, / They bore thee to Calvary: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
5. When the heavens shall ring, / And the angels sing / At thy coming to victory, / Let thy voice call me home, / Saying 'Yet there is room, / There is room at my side for thee; / And my heart shall rejoice, Lord Jesus, / When thou comest and callest for me.

21-505「歩ませてください」

O Master, Let Me Walk with Thee

1. O Master, let me walk with Thee / in lowly paths of service free; / tell me Thy secret; help me bear / the strain of toil, the fret of care.
2. Help me the slow of heart to move / by some clear, winning word of love; / teach me the wayward feet to stay, / and guide them in the homeward way.
3. Teach me Thy patience, still with Thee / in closer, dearer company, / in work that keeps faith sweet and strong, / in trust that triumphs over wrong.
4. In hope that sends a shining ray / far down the future's broad'ning way; / in peace that only Thou canst give, / with Thee, O Master, let me live.